

氏 名（国籍）	高 台 泳（韓 国）		
学 位 の 種 類	博 士（デザイン学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4459 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	環境グラフィックに関する研究 －その概念的整理及び、役割と現状の考察に基づくあり方の提案－		
主 査	筑波大学助教授	博士（工学）	花 里 俊 廣
副 査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	西 川 潔
副 査	筑波大学教授		穂 積 穀 重
副 査	筑波技術大学教授	博士（学術）	石 川 重 遠

論 文 の 内 容 の 要 旨

人間の生活空間を彩る視覚的イメージである環境グラフィックの歴史はさわめて古く、先史時代にまで溯ることができる。一方、1960年代になって環境への関心が高まるにつれ、環境がデザインの対象と意識されるようになった。「環境グラフィック」という名称が与えられ、デザイン潮流においても大きな領域を占め、現在に至るまで大きく展開してきている。本論は、現代における環境グラフィックはどのようなものであるか、を総括的に論じている論文である。

論文は、はじめに、第1章から第4章、おわりに、よりなる。

（目的）

はじめにでは、研究の背景と目的、研究の構成と方法について述べている。本研究の目的は、環境グラフィックとは何かを説明する理論的基盤が未だ確立されていないと判断されることから、第一にその概念的整理を行い、筆者自身の現地調査と文献調査に基づく事例分析を行った上で、役割と現状における問題点を把握し、今後のあり方を提案することである。

（対象と方法）

第1章では環境グラフィックに対する理論的考察を通じて、概念的整理を試み、広範囲にわたり存在する研究対象を予備的に分類して示した。

第1節では、環境グラフィックの特性として「環境との相関性」、「被膜性」、「時代との関連性」、「退行性」の4つがあることを示した。第2節では、環境グラフィックの存在場所に関する考察を行った。既存の見解には、人間の身体から自然界に至るまでの広い領域として捉えるものと、建築や建造物などに限るものの2つの立場が見られたが、本論では街路空間における建築物や建造物を中心に、事例の考察を進めていくこととした。第3節では、環境グラフィックの歴史的展開を考察した。20世紀後半以降、形式や内容において大きな変化が見られるが、その背景には、「環境に対する認識の変化」、「20世紀後半以降の建築におけるグラフィックの導入」、「アメリカのストリート壁画の拡がり」があることがわかった。第4節では、環境グラ

フィックの中で、特に大きな領域を占める「グラフィティ」、「壁画」、「スーパーグラフィック」、「広告」についてその特性をまとめた。さらに、第5節では目的や機能によって環境グラフィックの役割として3つの類型、「美的・文化的役割」、「産業的・経済的役割」、「政治的・社会的役割」に分類し示した。

(結果)

第2章では、第1章で導き出した環境グラフィックの3つの類型に基づいて事例の考察を進めた。

まず、「美的・文化的役割」については、環境グラフィックの諸事例を「文化遺産の継承」、「景観の形成と改善」、「表現領域の拡大」、「日常性の変化」に分けて考察した。次に、「産業的・経済的役割」について、「地域経済の活性化」というテーマでカナダとオーストリア、イタリアの事例を対象に考察し、「都市経済の補助」というテーマでラスベガスの事例によって考察した。また、「都市のリニューアル」というテーマでカナダと韓国の事例に注目して論じた。さらに、「政治的・社会的役割」について、「社会的メッセージの発信」「コミュニティの結束」「社会体制の維持」という3つの側面から事例に基づき考察した。

第3章では、環境グラフィックの現状と解決すべき課題について以下の6つのカテゴリーに分けた事例に基づき論じた。

第1に、制作者と市民との認識に隔たりが生じ、社会的論争が起こっている事例。第2に、画面の劣化や損傷が進んだ状態で環境グラフィックが放置され、景観に悪影響がある事例。第3に、完成度や芸術性が高い事例が、社会状況の変化によって削除を余儀なくされる事例。第4に、建物の所有主や地権者の判断によって存続が左右され、社会的対立と混乱が生じた事例。第5に、周辺環境との関係を考慮しないため環境グラフィックが景観阻害の原因になっている事例。第6に、表現力や描写力が未熟なため、景観の質的低下を招きかねない事例、である。

(考察及び提案)

第4章では、環境グラフィックの役割を最大に生かし、現状の問題を最小にするための今後のあり方を提案した。提案は恒常的なものと過渡的なもの、そして環境グラフィック全体に対しての、3つについて行った。

恒常的なものに関しては、環境グラフィックを地域性を考慮したテーマとすることは地域のアイデンティティや魅力を高めるために有効な方法と考えられること、メンテナンスのより効率的な体制をとるために具体策を模索すべきであることを論じた。過渡的なものに関しては、近年の科学技術の発達により存在感が増し今後さらにその役割が期待されることを、特に映像や光のグラフィックと仮囲いに注目して論じた。最後に、環境グラフィックの意義を更に高め、社会全体に対する相乗効果も生み出すために、環境グラフィックと社会との関わり合いについて考察した。

おわりにでは、これまでの考察内容の総まとめを行うと共に、今後の課題を提案した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、近年の多様化する環境グラフィックの現状の諸相を整理するために、筆者自身の現地調査を含む、実際の事例調査に基づき行われた基礎的考察である。論文では、環境グラフィックに関する概念的整理を試みた後、環境グラフィックの役割の類型に基づき事例を考察し、また、環境グラフィックの現状と問題点を考察して、さらに環境グラフィックの役割を生かし、現状の問題を最小にするためのあり方を提案している。このように基礎的分析・考察が中心であるとはいえ、実践面を意識した研究となっている。

審査ではいくつか考察不足の点について指摘されたが、その対象事例が広範囲に遍在していることを配慮すれば、1960年代以降の生成、変化しつつある現代的事象に対し、現地調査を行い意欲的に取り組んでい

る研究であり，まさに，現代的な課題に真剣に取り組んだものであると評価できよう。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。